

## 一 教育のゆくえ、その指針

平成十八年の教育基本法の改定により、第二条教育の目標が五項をもって明記されたことは記憶に新しいことと思います。そして、新設された目標の五項は、第一条の教育の目的が謳っている「人格の完成を目指す」ための教育の具体的視点を示したものであり、我が国の教育の指標の明示であると解釈できます。その理念を具現化するために、今後十年先を見据えた五年間の計画として平成二十年七月に「教育振興基本計画」が策定されました。その中で、特に重点的に取り組むべきものとして、次の九事項が明記されています。

- 確かな学力の保証
- 豊かな心と健やかな体の育成
- 教員が子ども一人一人に向き合う環境づくり
- 手厚い支援が必要な子どもの教育の推進
- 地域全体で子どもたちをはぐくむ仕組みづくり
- キャリア教育・職業教育の推進と生涯を通じた学び直しの機会の提供の推進

- 大学等の教育力の強化と質保証
- 卓越した教育研究拠点の形成と大学等の国際化
- 安全・安心な教育環境の実現と教育への機会の保障

これらは、知・徳・体の全人的教育の推進、教師の意識改革と資質向上を目指すものであり、国際的視野に基づく教育立国としての表明であると捉えられます。

リレー連載

教育のゆくえ

# キャリア教育の可能性

白木みどり

上越教育大学准教授



また、この中の地域教育力の向上、キャリア教育・職業教育の推進については、近年の若年層就業にかかわる社会問題（ニート・フリーター・早期離職率の上昇・モラトリアム現象等）を背景に重視されたものと考えられます。そして、計画の基本的方向1「社会全体での教育の向上に取り組む」では、その具体策としての「一人一人の社会的自立を実現するとともに我が国社会の活力の維持・向上の観点から、教育と職業や産業社会との相互のかかわりを一層強化し、人材育成に関する社会の要請を踏まえた教育を推進する」ことや、基本的方向2「個性を尊重しつつ能力を伸ばし、個人として、社会の一員として生きる基盤を育てる」などが示されています。このことから、キャリア教育が、今後の教育において重要な役割を担うものであることが推察されます。

## 二 キャリア教育が目指すもの

現在、小・中・高の十二年間を通したキャリア教育の一層の充実を図るために、その推進事業が進められていることは周知の通りです。さて、ではキャリア教育が目指していることは何なのでしょう。文部科学省は、キャリアとキャリア教育を次のように定義しています。

キャリアとは、個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くことの関係付けや価値付けの累積

キャリア概念に基づいて、児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育

端的には、児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てる教育

この定義の後段の表現から、仕事や就労に特化した教育、職場訪問や職場体験をすることがキャリア教育であると理解されることが往々にしてあります。特に、若年層就業問題の対応策、労働力確保のための教育であるとの見方だけでは、キャリア教育の根本理念を歪めることにもなりかねないと考えます。また、キャリア教育は、外国から突然入ってきた教育であるとの捉え方もよくある誤解です。

キャリア教育は、我が国の教育における進路指導の長い歴史を踏襲しているものであり、これまで、中学校を中心に熱心に実践されてきました。しかし、校種によってはその教育理念が理解を得られず、進路指導や出口指導と受け取られ、十分な成果を見ないまま今日に至ったという経緯があります。これまでの実態を受け、その後、進路指導の理念の継承と米国のキャリア・エデュケーションとの統合的教育ともいえる現在のキャリア教育が登場しました。そして、教育の現場では、小・中・高の十二年間を通した系統的、体系的教育が推進されるに至ったのです。そこで、キャリア教育は、次のような意義を掲げて、積極的な教育実践を促しています。

● キャリア教育は、一人一人のキャリア発達や個としての自立を促す視点から、従来の教育の在り方を幅広く見直し、

改革していくための理念と方向性を示すものである。

●キャリア教育は、キャリアが子どもたちの発達段階やその発達課題の達成と深くかわりながら段階を追って発達していくことを踏まえ、子どもたちの全人的な成長・発達を促す視点に立つた取組を積極的に進めることである。

●キャリア教育は、子どもたちのキャリア発達を支援する観点に立つて、各領域の関連する諸活動を体系化し計画的・組織的に実施することができるよう、各学校が教育課程編成の在り方を見直していくことである。（右線は筆者による）

すなわち、子どもたちが、自己の個性、能力、適性を十分に発揮し、将来、社会的自立を果たし、さらにその後の生活によりよく適応し進歩していく能力を育成することが、キャリア教育がめざすものであるということです。

### 三 望ましい勤労観・職業観の育成

そこで子どもたちの社会的適応と自立を促し支援していくために、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）——職業的（進路）発達にかかわる諸能力の育成の視点から——」で、四領域八能力をもつて職業的（進路）発達課題が示されていることは、周知の通りです。人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力の四領域には、「職業観・勤労観」を職業や勤労に対する見方や考え方としてでなく、意欲や態度を含む広い概念として捉えらるとともに、「職業観・勤労観」の形成

に直接的、間接的に影響を与える能力・態度が幅広く取り上げられています。しかし、それらの能力や態度の発達のためには、機能的に伝達される知識の概念的理解や技能の習得だけではなく、実生活の様々な場面や状況に対応するための価値観が求められると考えます。人が、生きていく過程では、心情、判断力、意欲や態度の決定を支えるための価値観が伴うということです。ところが、価値観に規制はなく、個人によって様々です。では、望ましい「職業観・勤労観」とは、どのようなものでしょうか。望ましい職業観についての「望ましさ」の要件として、次に挙げる内容が注目されます。

#### 【理解・認識面】

- ①職業には貴賤がないこと
- ②職務遂行には規範の遵守や責任が伴うこと
- ③どのような職業であれ、職業には生計を維持するだけでなく、それを通して自己の能力・適性を発揮し、社会の一員としての役割を果たすという意義があること

#### 【情意・態度面】

- ①一人一人が自己及びその個性をかけがえない価値あるものであるとする自覚
- ②自己と働くこと及びその関係についての総合的な検討を通して、職業・勤労に対する自分なりの構え
- ③将来の夢や希望の実現を目指して取り組もうとする意欲的な態度

（児童生徒の職業観勤労観を育む教育の推進について）《調査研究報告書》国立教育政策研究所生徒指導研究センター（二〇〇二）

知識基盤社会といわれる現代は、目まぐるしい情報技術の進歩とグローバル化による産業・経済の構造的変化に伴い、職業体系は複雑化し、雇用形態は多様化、流動化しています。知識と情報の入手と活用スピード化など、効率化、合理化による成果主義の重視や個人の利益を追求するあまりに、様々な問題が表出しています。

現況においては、インターネットによる不正株取引、汚職や贈収賄、背任行為、食品偽装問題、それらに追い打ちを掛けるかのように昨年のリーマン・ショックは、一夜にして全世界の景気低迷を加速化させ、ドバイショックをも引き起す結果となりました。我が国の中小企業倒産件数は過去最高となり、完全失業率は五・三パーセント、大学卒業者の就職率は六十二・五パーセントに低下し、回復の兆しが容易には見えてこない先行き不透明で不安な社会状況が続いています。

このような社会の実態を受けて、私たちは、「教育において何ができるのか、何をしなければならぬのか」を問い直さなければならぬと思います。前述した「望ましさ」の要件は、将来、社会生活を営む子どもたちが、社会に出るまでに認識しておかなければならない価値観の基礎的要因であると考えます。

「職業に貴賤はない」は、差別や偏見を許さないことの社会全体が目指す統一の見解です。職業の理想形態は、「経済性」・「個性」・「社会性」の三要素のバランスの上に成立するといわれます。どちらに偏重しても問題が生じることは前述の通りです。そして、職業上の規範の遵守、責任遂行などは、社会構造を正常に機能させる上での必要不可欠な価値観といえます。

職業倫理にかかわるこれらの考え方を題材とした学習の機会を重視することは、児童生徒の望ましい勤労観・職業観の育成においての効果的なアプローチの視点となり得ます。

また、児童生徒が、自己及びその個性をかがいのない価値あるものと自覚するためには、自尊感情を育むことが大切です。自己の存在そのものを肯定的に捉えることは、集団の帰属意識や所属感を高め、やがて連帯感へと繋がることになると考えます。更に、自分なりの価値基準、判断基準をもち、意欲的な態度で生きていくためには、それを支える価値観の形成が必要になると思われます。いかなる社会にあっても、場面や状況に対応しうる能力が、生涯を通して求められるということです。キャリア教育が「在り方、生き方の教育」であるといわれるのは、そのためです。

#### 四 教育課程編成の工夫

キャリア教育は、学校の教育活動全体を通じて行うものであり、領域としての位置付けがなく、その指導についても曖昧であると受け取られがちです。しかし、だからこそ教育活動のあらゆる場面でその題材を見つけることができます。

総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する能力や資質を育てることを基本方針とし、職場体験等を学習活動の例示としています。また、道徳については、その学習指導要領解説の中で、キャリア教育との関連に言

及しています。例えば、自尊感情の育成は、生命尊重を主題にその神秘性や連続性、有限性について考えることから出発できると思います。今、ここにある自己を肯定的に捉えることや個性の伸長、家族愛や友情などという内容項目の学習により育まれています。勤労の尊さ、権利と義務、責任、感謝など道德の内容項目の全てがキャリア教育の価値観形成に深くかかわっているといえます。特別活動においては、小学校の学級活動に希望や目標をもって生きる態度や望ましい人間関係の形成、清掃などの当番活動等の役割と働くことの意義の理解などが内容に盛り込まれ、中学校の学級活動の内容(3)には、「学業と進路」として、自己の将来に向けての生き方の学習が設定されています。さらに、各教科では、国語科の文学作品の登場人物の生き方から示唆を得たり、社会科での地域の学習やシチズンシップにかかわる基礎知識の理解、技術・家庭科での家庭生活の営み、メディアリテラシーの習得、ものづくりの基礎的技術の習得などが関連します。音楽や芸術は、生涯を通して人生を豊かにし、体育は、生涯の健康維持や人間関係形成などに通じる有効なキャリア教育の機会となります。

このように学校における全ての教育活動が、キャリア教育の題材になり得るということです。そこで、キャリア教育としてのねらいを発達段階に即して焦点化し、各教科、各領域間に見えてくる重なり合う部分や関連性を整理します。それらの関連を計画的、意図的に生かすために教育課程編成を工夫すること、諸活動が体系化されます。それを受け、組織的な実践が展開

されることによつて、効果的なキャリア教育が構築されていきます。

その実現には、中心となる教師のリーダー・シップ、アイディアやコーディネート力、そして何よりも教師全体の共通理解と意思形成が求められるということです。

## 五 コミュニティ教育力の再生

家庭、地域・社会との連携は、かねてからの学校教育における課題の一つであるといえます。これまで、狭義な解釈と活動にとどまり、実質上教育課程の殆どを学校だけが担う閉鎖的なものでした。

しかし、いじめ、不登校、少年非行などの子どもとの直接的問題、少子高齢、福祉、環境、国際などの社会問題と激変する社会の複雑化に伴い、今日、教育が取り組まなければならない対象、領域は、劇的に広範囲に及んでいます。育成しなければならない現代の子どもたちの能力は、学校教育に限定される性質のものではなく、生きていくといえます。

これらの問題解決のためには、児童生徒の学習活動のフィールドを地域・社会に広げ、多様な学習場面と学習内容の提供が求められています。特に、キャリア教育においては、この視点は重要です。新しい出会いと体験から生まれる発見や探究心、人間関係形成の実践など、コミュニティ全体とのかかわりの中で、子どもたちのアイデンティティの形成に結びつく多く

の機会の設定や、積極的な道徳的にかかわりへと子どもを導くことのできる人材を見出すことが可能となります。教師は、その可能性を有機的に実現するために、教育的問題の解決をねらいとし、学習内容の周到な精選と整備のもと、積極的に連携の意思を示していくことが大切です。

また、ともするとどちらかが請負的役割として分離分業に終始してしまいがちなPTA活動の活性化に意図的に働き掛けるのが効果的です。教師は、保護者に児童生徒の活動の目的やねらい、理論背景などを入念に、かつ分かりやすく伝える機会を設定し、保護者の教育への関心や意識を高めることが必要です。キャリア教育においては、保護者の職業観や人生観など、保護者の価値観が、子どもの成長過程やその後の人生に大きく影響することを保護者自身が気づき、子どものよりよいキャリア発達を支援する家庭と学校相互の役割の理解を深めることが重要です。学校が積極的に保護者、コミュニティへの情報発信源となり、また情報受信地となる情報循環の構想が、コミュニティ教育力の向上に有効に作用していくものと考えられます。

未来は、どのような社会になるのでしょうか。  
やがて、その未来の社会を担う立場となるのが、目の前の子どもたちです。その子どもたちが、学ぶことや働くことの意義をそれぞれに受けとめ、自己にふさわしいキャリアを形成しながら社会的に自立していく能力を育成すること、また、生涯を通して、よりよく生きていくこうとする意欲や態度を育むことが、今、学校教育に求められているということです。「教育振興基

本計画」に見られる「個性を尊重しつつ能力を伸ばし、個人として、社会の一員として生きる基盤を育てる」ことは、「個人の尊重」を内包することを前提とした社会連帯であり、いわば、「新しい社会連帯」の推進であるとも捉えることができます。未来社会の担い手を育てる教育の意義と教える者の役割を、キャリア教育を通して考えさせられています。